

仲屋の「天神水」

朝見糸永家のこと

真光寺の堂宇は既に失われているが、地名は今も残っている。

脇蘭室の「瀧のやどり」に『：朝見村之真光寺といふ所を過ぎる。昔あい識りたる僧を懐出て訪ふに、今は異寺に住るよしにて、ここには長門の僧徹叟とかいへるが在りけるが、余が名を知って懇に物語し、自ら出て山路を導きて別れぬ。』と文化四年に観海寺への路を訪ねたときには、まだ真光寺の堂宇はあった。

真光寺の開基は恵海和尚といわれている。恵海和尚は元禄時代に酒造業を起こした「仲屋」市郎兵衛の第三子平五郎で、元禄三年から十八年間、河内の法雲寺で修行して僧となり、父が施主となって建立した真光寺を開山したのである。

「仲屋」糸永家

「仲屋」の糸永家（朝見三丁目六ノ一〇。現当主、糸

岡部 光瑞

永益祥）は大友氏の全盛時代に大野郡の糸永山の麓から移住して来た一族といわれ、或いは宇佐から移住してきた一族とも言われている。おそらく朝見郷の宇佐神宮荘園化に伴って宇佐より移住してきた、豊前の「イトナガ」がルーツであろう。仲屋とは創業地の朝見の字「中」を取り「仲屋」を名乗り、酒造業で身上を立てた素封家であ。天保八年（口伝）に火災にあつて「仲屋」は没落したと言はれる。貞享・元禄頃から代々当主は惣右衛門を襲名したが、なお真光寺を中心に十八町歩の土地と朝見字「枇杷の木」・紫綺羅山一帯の山林田畑を所有する大地主であった。惣右衛門は朝見村庄屋堀駒之丞の代理を勤め、年貢米の検査、切支丹の絵踏みなどは糸永家の座敷や庭先で行われたといわれる。火災前の惣右衛門家には多くの食客が訪れた。学者の唐橋世済や田能村竹田や枅築の十市石谷など文化人も草鞋をぬいでいる。

氏子が、神社の祭礼に先立って神前で催される大座おとぎに着座する神官（村人の有力者が担当する）の順序は、それぞれの地位を表すともいわれる。

天保十三年の朝見八坂神社（祇園宮ぎんぐわ）の大座着座表「天保十三年壬寅十一月 先年ヨリ有来ル古キ座許帳写之」によるとも当時の模様が浮き彫りにされている。西方面の中央部は小野相模正、その右が「一ノ出いせ」の高橋新兵衛・同高橋新右衛門、その右が「中」の糸永惣右衛門・同常吉、左が「童子丸」の安倍究右衛門・同文右衛門・同甚助。その左が「魚田」の村田七兵衛と云う順のなっている。南方は「南」の河村伊右衛門、「畠中」の安倍勘兵衛・同吉右衛門。東方は「古賀」の甲斐団右衛門、「橋本名」の安倍六右衛門、「辻本」の安倍藤右衛門、「橋本」の堀清右衛門・同七郎右衛門・同八郎右衛門。北方は「河床」の甲斐忠兵衛・同藤兵衛・同源兵衛、「枇杷の木」の大野太郎兵衛で、「別府村屋敷名あい分り申さず分」として永井長右衛門、佐藤左平、日名子豊太郎を上げて二十六人と書かれている。氏子で以前屋敷名があつて當時はその人物（神官）を欠いているものに、丸屋敷、目

代、腰ヶ平、山本、引野、坂本、渡内、栗本、平野、黒井、堀田、芝原がある。座席は右が上位である。正面の宮司の右に「一ノ出」の高橋家の右に着座し、次に着座す「中」の糸永家は上位の格式が与えられている。

火災後「仲屋」は水車を使って搗米屋を営んだ。

明治二年、宇佐郡津房の名門大坪家から十八歳のお縫いさんが迎えられた。お縫いさんは、十年間里帰りをひかえて冗費をはぶき、髪結銭・衣服費を節約して、糠で睫毛を白くしながら水車小屋で働き、米を上白米に仕上げ工夫をした。「仲屋に頼めば雪のような白米が搗きあがる」と評判されるようになり大分からも注文がきた。「仲屋」に頼んで早く搗き上げて貰うには、酒一升に鯛一尾の祝儀がいると言われたはどもてはやされたと言う。

「天神の水」

十二月二十五日の朝、流川上組の有志代表は酒と肴を持って、上朝見の糸永家の天神様のお祭りに詣でるのが江戸時代からの「仕来たり」であった。彼らは上朝見から足ごしらえを十分ににして、田の畦をたどりながら坂道を登って来た。この日、糸永家には広い座敷から庭先



天神水の水口

の筵席までいっばいに、上朝見地区民や糸永家一族が集まっていた。同家は、六斗樽の甘酒を庭先に置いて皆にふるまい、近所の子供たちにお相伴に預かった。

中の糸永家は屋敷の裏鬼門に当たる東北隅に天神様が祭つてある。天神社の下に石造りの井泉があつて豊醇な清水がこんこんと湧出していた。糸永家が元禄年間以降、代々酒造用に供して真光寺を建立し、また、その子孫が明治まで米搗きの水車を廻して仲屋の繁盛をもたらしした水である。

この井泉の清水は仲屋の「天神の水」とか「朝見の糸永の水」と呼ばれた。「朝見八幡宮の西方、村丘の下に地下水湧出す。これ又一箇の好清水、これより川流れに沿つてますます上ればいよいよ水溪となり、終わりに御塔原に至る（豊後温泉誌）。つまり、小鹿山の深い山ひだをくぐつたこの地下水が、やがて天神社の下で噴き出すような水勢で湧き出るのである。

「天神の水」は、三伏旱天の際も少しも減水することのない「味わい甘味にして、猛暑なお水の如く冷かである。」といわれる名水である。文政五年（一八二二）田能村竹田は「黄築紀行」に、

「○ 六日 ……詣朝見祠 祠西数町 有井水 出石間 相伝宜茶 為里中第一 下山至長松寺 洗、試石井水 果佳 ……」

つまり、「六日、朝見神社に詣でた。神社の西方数町の所に、石の間から涌く出水がある。処では茶にもっとも宜しいといひ伝えられている。山を下りて長松寺におもむき？（鉄瓶）を洗つて石井の水で茶を立ててみた、思ひどおり美味であった。」と書き、また、十一日の項に

は、杵築城下の□^{コノ}室^ム下の水、三左有森氏後園の水、鶴崎御前水と共に別府の朝見石井の水を上げている。

初めての上水道

江戸時代末から、別府村の酒造業で豪商「萩屋」^{たばな}が、朝見の水を杉や檜で作った樋で中町まで引いて酒の醸造に用いていた。また、明治初年には流川上組の人々が糸永家に請いて井水の分譲を許され、別府初の上水道として用いられるようになり、日名子の前の水槽にコンコンと湧き出していた。十二月二十五日に上朝見の人びとを始め、流川上組の有志が、天神祭りに詣でるのは、日ごろ「天神の水」の恩恵にあずかるお礼参りである。

朝見八幡の「万太郎清水」

「天神の水」を水源とする上水道は、数か所に水汲み場を設けて一般の人々にも利用された。旧日名子ホテルの前身の日名子旅館もこの水を使っており、中町の「屋」前の水汲み場は、毎日、中町や南町の人々の飲用水となっていたという。

この上水道が廃止になった理由は、後の別府市長故神澤又一郎翁はその回顧談に、「多額の経費をかけて敷設し

たのに、ややもすれば水不足をきたすので柳温泉付近の下流川の人々との間に水利権争いの問題が生じ、「天神の水」上水道は久しからず中止した」と述べている。別府町当局は大正三年^{あゆかえり}鮎返川と乙原に貯水池を作り、大正六年に朝見浄水池が竣工して公設の上水道が完成した。上水道の完成とともに不用になった「天神水上水道」は廃止されて、水路が朝見神社境内に引かれるようになった。これが「万太郎清水」である。

「万太郎清水」の名の起こりは孝子万太郎の伝承はあるが、糸永家の伝承によれば、「…宝永元（一七〇四）先祖の糸永市郎兵衛の時代に、窯^{かま}のある奥の迫田に…」にも湧水があり、陶工の万太郎が朝夕飲用にし、口を漱^{すす}ぎ、粘土をこねていたので、万太郎水と呼ばれていた。万太郎水は「天神水上水道」が水不足の時には、一時その助勢に使用していた。このようなことから「万太郎」の名が残ったのであろうといわれる。

「天神の水」は今も糸永家の屋敷内でこんこんと湧き出ている。